

平成28年11月22日(火)

老球の細道285号

たかがあいさつ、されどあいさつ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

最近孫娘のおかげで近所でも有名なおじいちゃんになってしまった。我が家の孫娘は2歳になるが誰とでもあいさつをする。ひどいときは近所の犬や公園のアリのまであいさつをする。散歩の途中で出会った人たちにもあいさつをするので、私の顔まで知れわたってしまった。知らない人にも平気で声をかける孫娘を見て両親は心配をするのだが・・・。

そんな矢先、新聞の投稿欄に『あいさつをしない子どもたち』というのを見つけた。それによると、小学校の前で、時間ぎりぎり駆け込んでくる子どもたちに、近所の主婦が「おはよう」と声をかけたところ、子どもたちは何も言わず一目散に走り去った。またある日、子ども二人が自転車で並走中に転んだのを見かけて、自転車を起こし、転んだ子に「立ち上がるか？」と声をかけたところ、返答もしどろもどろで目もあわず立ち去ってしまった。犯罪から身を守るために「知らない人にはあいさつしていけない」と教わるということを友人から聞いて、これでいいのかと憤慨する60代主婦の投稿であった。

この投稿を読んで私にも同じような経験があったことを思い出した。1件は、須賀川でクリニックがあった時だった。カーナビがなく勘ナビに頼る私は体育館の場所が分からなくなってしまう、その時車のそばを歩いていた男子中学生に体育館の場所をたずねた。そしたら100%無視、シカとで教えてもらえなかったのである。私を不審者として判断したのだろう。もう1件は、坂下で雨でびしょ濡れになって道路を歩いている小学生に「大丈夫か？」と声をかけた時である。この時も完全に無視された。今どきの子どもたちは寂しい時代に生きているものだと思いの気持ちも寂しくなった。

反対のこともある。家の近くをジョギングしていたら、小学生が自転車で私の隣に並走し「こんにちは。がんばっていますね！」と声をかけてくれた。知らない人に声をかけるなというご時世なのに、なかなか骨のある小学生がいるもんだと我が家では夕食の話題になった。だから、孫娘の攻めのあいさつには爺馬鹿かもしれないが一目老いている。

そもそも「挨拶」という字の「挨(あい)」は「心を開く」という意味で、「拶(さつ)」は「相手に迫る」とか「その心に近づく」という意味がある。要するに、挨拶とは、自分の心を開くことで相手の心を開かせ、相手の心に近づいていく積極的な行為である。「心と心の架け橋」の挨拶がないと良い人間関係は作れない。良い人間関係が作れなければ良い家族、良い仕事はできない。すべては挨拶から始まる。

高校、大学入試、就職試験などで面接のために、少しでも印象をよくしようと、あいさつの練習や指導などをするが、どうもわざとらしくて同調できなかった。小さい頃から家庭での「おはようございます」から「おやすみなさい」。バスケットボール活動においては、コーチ、チームメイト、関係者に対して「こんにちは!」「お願いします!」「ありがとうございました」が笑顔でできるように毎日習慣化する。そうすることで、誰にでも、いつでも、どこでも自然にあいさつができるようになっていくのではないかと。どこかの運動部のように身内の指導者、仲間だけに対する度の過ぎたあいさつなどは不要。

あいさつは心を広くする。子どもたちが誰にでも相手の目を見ながらごく自然にできるよう、私たち大人が笑顔で手本を示したい。ちなみにゲームとあいさつは先手必勝。